

オフィスの入口をくぐると、すっかり暗くなった空が目に入る。もうこんな時間かあ。今日も疲れたなあ……。ヒールのパンプスを履いた脚が引き攣るような感じがして、思わずため息をつく。この分だと、明日は結構むくんじやいそうだなあ。今日はお風呂入ってマッサージでもして、早く寝ちゃおうっと。

「ああ、ちょっとそこの方」

「え？ なんですか？」

「こんばんは。お疲れに見えたので、ついお声掛けしてしまいました」

そうにこやかに話すのは、二十代後半くらいに見える清潔感のある男の人だった。いわゆる塩顔、という感じで、見るからに華やかな感じは無いが、よく見るとかっこいい顔立ちをしている。疲れていたところに現れたイケメンに、私はついつい足を止めてしまった。

「僕は、ここの建物でマッサージ店をしているものです」

「えっ、そうなんですか？」

男の人が指さす建物には、確かにマッサージ店の看板があった。職場の近くにあるのに、全然気が付かなかった。

「すみません、全然知らなかった……もしかして最近出来たんですか？」

「そうなんですよ。つい今月できたばかりで。実は今回お声がけさせて頂いたのも、それに少し関係がありまして」

「はい……？」

「当店は今月出来たばかりなので、まだ知名度が低い状態です。ですから、無料体験のキャンペーンを実施しているんです」

「無料体験？」

実は私は、家で自分でほぐしてみたりはするものの、お店でプロから本格的に――となると、いまだにマッサージの経験がなかった。なんだか少し興味が湧いてくる。食いつく素振りを見せた私に、彼はほほ笑みかけた。

「今なら初回限定で六十分コースが無料になるんです。どうですか？ もちろん、一度試すだけでも大丈夫ですよ」

「えっ、六十分も」

「はい。初回限定ではありますが、継続して頂ける場合はその後のお値引もありますよ」

聞けば聞くほど、メリットの大きいプランだ。そのお得なサービスに単純に惹かれたし、今日は特に疲れていたこともあって、無料ならやって損は無いだろうと思い、私は彼の言葉に頷いた。

「ぜひ試してみたいです」

では、こちらへどうぞ。そう微笑む彼に連れられ、私はビルに足を踏み入れた。

案内されて中に入って見たお店の中は、きちんとした感じで、掃除が行き届いている印象を受ける。

「そちらのソファへお掛けください。お疲れでし

ようから、お茶でもいかがですか」

「ああ、ありがとうございます」

手に取ったカップは温かく、冬場の冷えた指先をじんわりと暖めてくれた。私は手渡されるままに、その中身に口をつける。飲んでみると、ハーブのような少し変わった香りのするお茶だった。けれど不快な味ではなくて、わたしは温かさに釣られて二口ほど口にしてカップを置いた。

「今回施術するのは、オイルを使ったコースですね」

ロビーで軽く説明を受けたあと、ロッカーに荷物を預け、個室へと移動する。

カーテンで仕切られた簡易的な更衣室の中に入ると、こちらに着替えてください、と渡されたのは、紙で出来た下着のようなものだった。少し露出が多いような気がして一瞬面食らったが、相手はプロだし、そもそもマッサージをしたことのない私の認識が違っていたのかもしれない、と思い直した。

「それでは、施術を始めていきますね。まずはうつぶせになってください」

言われるままに、マッサージベッドへごろりと寝転がる。まだマッサージは何もしていないが、雰囲気がとても良い、と感じた。眩しくない、少し薄暗い程度の橙色の優しい照明。耳触りのいい落ち着いた音楽がかかっているし、花のような良い香りがふんわりと漂ってくる。

「なんだかいい香りがしますね……」

「ありがとうございます。リラックス効果のあるアロマを焚いているんですよ」

そう言った後、彼は部屋の隅にある木製の棚からシンプルな透明のボトルを取り出し、私に掲げて見せた。

「こちらが今回使用するオイルです。まずは背中全体に伸ばしていきますね」

粘度の高いオイルが、とろ、と背中に垂らされる感触があった。事前に温めてあるのか、冷たさは感じなかった。

ぬるり、と手のひらが這わされ、体温と混ざりあってじんわりと体があたたかくなっていく。

「ん……」

肩の周りを指圧されたり、肩甲骨をなぞるように揉む手の動きが心地よい。

しばらくそうしていると段々と眠気が襲ってきて、気づけばうとうととまどろんでしまっていた。

「……せん……みません」

「ん……あ……？ 私……」

「すみません。起こしてしまって悪いのですが、前の方を施術したいので仰向けになって頂けますか？」

「え……？ あっ、ごめんなさい。私、寝ちゃって……」

「いえいえ、よくある事ですよ。むしろリラックスして頂けて嬉しいです」

仰向けになると、そう微笑む彼と目が合った。
眠っていて気が付かなかったけれど、いつの間にか体全体がぼかぼかと熱くなっていて、じんわりと肌に汗が浮かんでくるほどだった。

「少し、あついかも……」

「体がぼかぼかしてきましたか？ マッサージが効いている証拠ですね」

「そうなんですね」

「それでは、お腹の方も失礼しますね～」

お腹の上をオイルをつけた手がぬるぬると動く。
時折腰のあたりを指先が滑ると、くすぐったいような、よく分からない感覚に襲われた。

「んっ……ちよっとくすぐったいですね」

「腰の辺りは敏感な場所ですからね。次は胸元もほぐしていきますね」

えっ、と声を上げる間もなく、するすると胸元の方へ手のひらが滑ってくる。おっぱいを包み込む大きな手が、もっちりとした肉を持ち上げるようにして全体を揉み始めた。

もみっ♡もみっ♡たぷんっ……♡

「んっ♡♡えっ、そ、そこもするんですか？」

「はい、実は女性の方は意外と凝りやすい場所なんですよ。自分では気が付かない方が多いんですがね」

もみゅっ♡もみっ♡むにゅうう～♡♡

「そ、そうなんですか……おっ！？♡♡」

おっぱいをたぷたぷ♡モミモミ♡されているうちに、不意に乳首に指が当たってしまった♡♡驚いた私は、咄嗟に下品なオホ声を上げてしまう♡

「……痛いですか？」

「い、いや……すみませんっ」

「いえ。では、続けていきますね」

「おほっ♡♡」

続けて何度か乳首に触れる指先に、はじめは偶然かと思った。が、彼の動きは、次第に胸全体ではなく乳首だけに触れるようなものになってしまう♡

指先で弾くようにして、こりこりと刺激したり。時にはきゅっと摘んで軽く引っ張るような動きをされて、私は腰をモジモジ♡動かしてしまう♡

「……おお〜っ♡♡おんっ……♡♡……そ、そこも、マッサージするんですかあ……っ♡♡」

「ああ、初めてだとびっくりしちゃいますよね。あまり知られていないのですが、神経が集まっている場所なので、ここをマッサージするのはすごく大切なんですよ♡」

「そうなんですか……っお、ほお……♡♡」

必要なことだとそう教えられても、そこは女の子にとって大切な♡恋人にしか触らせないようなところだとぼっかり思っていたから……♡そんな箇所を重点的に捏ねられるのは、やっぱり羞恥心がある♡

色々なことをぐるぐると考えていたとき、不意に、ぎゅっ、と一際強く乳首を指先で刺激されて……♡♡

むぎゅううっ♡♡
「んおっ♡♡♡」

マッサージなんかじゃなくて、乳首をコリコリ♡♡愛撫されてる時にしか出しちゃいけないメス声を上げてしまう♡♡

「ご、ごめんなさい♡」
「お……っ♡気にしないでください、私も色々なお客さんを施術して慣れてますから。気持ちよくて自然と声が出ちゃう人って、意外と多いんですよ♡」
「そ、そうですかあ……♡」

その言葉を聞いて、少しほっとする。そうだ、相手はマッサージのプロ。何百人、いや、もしかすると何千何万人といる中の客一人が漏らした声なんて、いちいち気にするほどのことでも無いよ

ね……？ 私はそう自分に言い聞かせた。

「乳首、だいぶ凝っちゃってますねえ。ビンビンの硬くなってる♡」

乳首をカリカリ♡捏ね回されたらみんなビンビン♡にメス勃起しちゃうものだと思ってたけど♡私の乳首、そんなに凝ってるの……？♡

「ほら♡こうやってシコシコ♡できちゃうくらいおっ勃ってますよ♡♡」

シコシコシコシコ♡♡♡♡ぴんっ♡ぴんっ♡♡

「おほおっ！？♡♡♡おっおっ♡♡♡♡やっ♡♡乳首シコシコしちゃ♡♡」

こりこりこりっ♡♡♡シコシコ……っ♡♡♡シコ♡シコ♡シコ♡

「んおおおっ♡♡♡おっダメ♡♡♡乳首ダメええっ♡♡♡」

シコシコ♡♡と両方の乳首を指先で扱かれて♡
恥ずかしい声が漏れちゃうの我慢できないよお♡
♡

「おお……っ♡♡いいですよ♡メス声を上げると
もっと解れやすくなりますからね♡……次は下半
身のマッサージをしますね♡」

「あっ……は、はい♡」

や……っ♡まだ乳首ビンッピンなままなのに♡
もっと触って欲しい♡乳首コリコリ♡シコシコ♡
弄り回して欲しいっ♡

「脚の付け根あたりを揉んでいきますね～」

オイルがたっぷりと垂らされて、それを均等に
伸ばすように手のひらが太腿の上を滑った。太腿
の付け根をほぐす度に、おまんこにちょっと指が
当たっちゃって……♡♡乳首をイジイジ♡されて
欲求不満な私の体は、敏感に反応してしまう♡

むにゅ♡むにゅ♡……すりっ♡

「おっ♡」

体はじんじんと火照って、触れられた箇所から
ぴりぴりした感覚が伝わってくる♡ときどきおま
んこのふちに指先が引っかけると、じわ、とお腹
の奥が熱くなるような感じがしちゃう……♡

「んおっ……♡♡」

「施術の邪魔になるので、下着は脱がせちゃいま
すね～」

「……んえ……？♡あっ……♡」

体を包む火照りにぼうっとして、彼の話すこと
が上手く飲み込めなかった♡その間に、手早く下
着を脱がされてしまい……♡

オイルを追加され、ぐい、と片足を持ち上げら
れてしまった♡♡開脚させられてくぱあ♡と開い
たおまんこに、じっと視線が向けられているのを
感じる♡♡

「ほお……っ♡お、おまんこじっくり見ちゃダメ
……っ♡♡♡」

「大丈夫です、安心してください♡実は、おまん
こを見ると健康状態が分かったりするんですよ
♡」

「えっ！？♡そっそんな……♡」

ぐいっ♡♡くばああ……っ♡♡

オイルを纏った指が、おまんこのふちをなぞる
ようにねっとりと這って♡それから思い切りくば
あ♡とおまんこを割り開かれてしまう♡♡指を動
かしながら、診断でもしているかのように彼は言
葉を続けて……♡

「おっほ……♡♡綺麗なピンク色ですね♡♡」

「おお……っ♡」

恥ずかしい♡♡まさかマッサージ師さんにおま
んこをじっくり♡見られて、その状態を報告され
るだなんてことが一生のうちにあるだなんて夢に
も思わなかった♡♡

「色や形には問題ないですね♡ごく普通のエロいまんこですよ♡♡ああでも、少しクリちんぽが大きいかな……♡」

「えっ！？♡」

彼は最後に小声でぼそりと呟く♡♡やだっ♡♡いっつもクリちんぽオナニーばっかりしてるから♡♡私のクリちんぽ、人より大きくなっちゃってる……！？♡♡

くりっ♡♡

「おおおっ！？♡♡♡」

「このクリちんぽ、いっつもどうやってイジってるんですか？♡♡机の角にごりごり♡押し付けたり……皮の上からなでなで♡したり……ああ、もしかして皮ズル剥けにしてシコシコ♡自分で扱きまくってるのかな……♡♡」

「いやあっ♡♡♡そ、そんなことないですから♡♡」

やばいやばいやばいっ……♡♡図星だ♡♡いっ

つもおまんこ弄るだけじゃ足りなくて♡ビンビン
になった勃起クリちんぽ剥いて♡♡足ピンしながら
アヘアヘ♡舌突き出してシコりまくってるのバ
レちゃうよお……っ♡♡

「ふふ、冗談ですよ♡♡じゃあ、こちらも解して
いきますね……♡♡」

おまんこに直接オイルを垂らされて♡オイルな
んてなくてももうぐちょぐちょ♡♡になってたお
まんこに、ずにゆうう♡♡と指が差し込まれた
♡♡

「おおおお……っっ！？♡♡♡♡」

「おっ……♡♡おまんこの中やっべ♡♡オイルた
っぷり使って、ゆっくり挿れていきますからね～
♡♡」

言葉通り、滴るほどにオイルを纏った指が、ゆ
っくりとおまんこに押し込まれていく♡♡私のお
まんこはとろとろに蕩けて、すんなり指を受け入
れてしまって……♡♡

ぬちゅっ……♡♡

「お、お〜っ♡♡」

「痛いですか〜？」

「い、いやっ……♡♡痛くは、ないですけどっ
……オオッ！？♡♡♡♡」

こつん、と一番奥の子宮口♡に指が当たったのが分かる♡指一本を、ずっぼりと根元まで咥えこんでしまった♡♡

「それなら良かったです♡軽く馴染ませていきますね♡」

ぐちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

「んおっ♡♡おっおっ♡♡♡んほおっ♡♡」

指を抜き差しされるたびに、オイルも手伝って、くちゅくちゅ、と濡れたエッチな音が響く♡おまんこの中を擦られる度にじんじんと体が疼いて、吐息混じりのオホ声が漏れるのを抑えられない

……っ♡

「こ、これっ……♡んおっ♡マッサージなんです
か……っ♡♡」

「ああ、おまんこ穴はデリケートですからね♡ま
だ慣らしている途中なんですよ♡そうですねえ、
おまんこのツボは……この辺、かな♡♡」

ぬふぬふと機械的に出し入れしてただけの指
の動きが、ぐるん、と中を探るようなものに変わ
る♡そして、指先がある一点を掠めたとき——♡

ぐちゅっ♡ぐりぐり……っ♡♡

「んほおお～～っっ！？♡♡おお……ッ♡♡」

目の前がちかちかとスパークするような、もは
や暴力的な感覚に襲われる♡♡これ、ツボじゃな
くてっ♡♡女の子の気持ちいいところ♡♡Gスポ
ットじゃ……♡♡

ぐりゅっ♡ぐりゅっ♡ぐりゅっ♡

「分かりますかー？♡ここです、ここ♡」
「ひいっ♡♡おおっ♡やっ、そこ、ごりごりらめ、
おお～～♡♡」